
優しい悪魔 / rui.love(完結)

晴(ヒトミ)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい悪魔 / rui・love (完結)

【Nコード】

N6255P

【作者名】

晴ルビ

【あらすじ】

ゴク怖！

本館でのリクエストにお答えして作成しました。

相模目線の短編です。

独占欲

G O K U K O W a

好きになれ

頬に口づけた。

「……相模……」

俺しか聞けねえ
甘い声が漏れる。

「……ルイ、

お前が好きだ。

どうしようもなく、

俺の独占欲を掻き立てるお前が。

苦しい程に

お前が好きだ……。

「相模、アンタが好きだ……」

「……ルイ」

「好きだよ……」

俺の、待ち焦がれた言葉だ。

「……マジ、かよ」

「……………」

両手にルイの温もりを感じながら唇を塞いだ。

いつもは身を委ねるだけのお前が
初めて応える様に腕を絡ませてくれた。

この顔…。

俺だけが知ってる、
女の顔。

攻めてやると
無意識に曝け出す、
可愛いすぎるお前の表情。

———言ったな、

俺を好きだと。

「もう一度、言ってくれ…」

その可愛い唇が
マジで俺に言ったんだな。

「好きだ…、相模が。やっぱりアンタが好きだよ…」

「……ルイ…！」

嘘じゃ

無えんだな……！。

お前の声も

顔も

その表情も…、

たまらなく愛おしい。

「……相模、痛い」

柔らかい身体。

抱き締めると
すぐに女だと解らせてくれる。

「…相模、痛い」

「そんな強く抱き締めてねえだろ…?」

「いってえんだよ、バカ!!」

ガゴン！！！

……。

何だーーーーー？

「わ、若！… どうおなれしました！？」

「……あ？」

何だ、コレは。

「あ、頭から血イが出てますぜ！」

「……何だ、お前は」

「は？」

何故、イキナリ部屋から車の中に移動している…。

「ルイは何処だ」

「……………」

イライラする。

早く答えろ。

「あの、嬢さんなら…ついさっき若が組に送られましたか」

「ああ!?!」

「危ねえ目に遭ってはいかねえから、若がそつじると…」

「……………」

「思い出されましたか」

まさか、

そんな——。

「珍しくよく眠っておられました」

眠って居ただと。

この俺が…。

「――夢、かよ」

独占欲 2

なんてザマだよー！。

「おい」

「へい」

「ルイはどっしってる」

「……ちゅあ…」

「調べる。今すぐ」

「若………、いえ……承知しました」

最近煙草を解禁した。

お前に触れられない時間は、ヤク切れみたいになっちまう。

これは

ほんの紛らわしだ。

隣の男が携帯を閉じる。

コイツが来て、14年になる。

「リヨウさんと朝食を食べてるそうです」

「な、んだと!?!」

アイツはまた…!

目を離すといつもこうだ。

「……変更だ」

「…はい?」

「中止だと言ったんだ…!」

“仕事” してる場合か。

お前は俺が隣で見てねえと 必ず何処かに行く様だな、ルイ…!!

「連れて来い」

クソ、

イライラする。

「何だその溜息は!？」

「……いえ、何でも」

日本を牛耳るヤクザ、相模組。

組員総勢数万人。

この国は俺の住処であり、

この東京^{マチ}は俺の庭の様な物。

17歳にして、その指揮権も支配権も俺の手中にある。

相模組 6代目若頭 相模龍。

この俺が、

ただ一つ

未だに手中に出来ない物がある――。

「クソつ、離せ！ バカゲンじい！」

「――ルイ……」

お前だよ、ルイ。

「悪いが、若の命令は絶対なんぞな」

「はあ!？」

恋焦がれて

夢に見る程、

お前が欲しい…。

突然連れ出されて意味が分からない、という顔。

出会った頃から

男にしか見えねえ見た目。

媚びる事の無い立ち居振る舞い。

「相模、アンタ何考えてんだよ!？ 下ろしたり連れ出したり…!」

今も男にしか見えねえそいつを
半ば奪い取る様に抱きしめた。

「俺がいつお前を呼ぼうと勝手だろ」

夢じゃねえ

現実の感触。

お前独特の、女の匂い。

コイツの匂いが好きだ。

「相模……………！」

お前の魅力が
中から溢れる様な香りだ。

抱き締めると、
たまらなくなつて いつも口付ける。

「お前がよそ見してんのが悪いんだぜ」

「何言つて…」

クイと顎を上げて口付けてやると、
いつも大人しくなる。

蜜の味——。

首筋へのキスも

舌を使ったキスも

最近嫌がらなくなった。

「……うあ」

甘い声を出して受け止める。

——たまんねえ。

ルイ

その目が俺だけを見てくれるなら

お前の喜ぶ事

全てしてやりたい。

「下げれ」

「へい」

お前は何が好きだ？

「相模、下ろせよ！ 何、何処行ってんの」

「…いい所だよ」

何に興味がある？

「はあ！？ まさかお前 こんな所で変な事する気かよ！？ や、やめろよな！」

「バカか」

何が欲しい？

「う…っわ……………」

「綺麗だろ」

全て叶えてやるー！。

お前の望む物全て、

俺が与えてやる。

「相模でも花は綺麗って思っんか」

「殺すぞ」

「……………」

お前を待ってる途中見つけた。

これからの季夏の訪れを魅せる
紫陽花の花畑。

珍しく心を奪われた。

「歩いてみるか？」

一面咲く花々の中に
ルイをそっと下ろした。

「おお…、すげ」

俺と比べて小ぶりだから
すぐ花に埋もれる。

「花は好きか」

目の前を歩く可愛い女が振り返る。

「おう。 母ちゃんがよく向日葵植えてた」

「そうか」

今度、向日葵畑を捜しておおう。

「ルイ…」

「何？」

「じっちおいで」

独占欲 3

いつもこうやって呼ぶだけじゃ来ないよな、お前は。

「おいで」

俺が手を差し出すと

何故か寄って来る。

俺の手に誘われるみたいに。

「好きだ」

そう言って抱きしめた。

「相模……」

下から湧き立つ様な花の香り。

お前の匂いと混ぜる。

偉く官能的だった。

強引に押し倒して口付ける。

紫陽花が

俺達の姿を隠す。

ルイが逃げない様に

始めは優しめのキスを繰り返す。

付いては離れ、

またそつと合わさる。

「相模、だから こんな所で……」

有無を言わせず

深く唇を塞ぐ。

舌を使って

お前の甘さを感じる。

「今晚…、来いよ」

「アンタがいつも呼びに来るだろ…、こっちは」

「フン」

白いシャツのボタンも外しに掛かる。

「っ」

「っ」

ゆっくりと時間を掛けて…。

「お前 マジでこんな所で…！」

「誰も見えねえよ」

少しずつ服を剥がすに連れ、
恥ずかしそうに頬を染める

お前の反応が好きだ。

嫌と言いながら
殆ど抵抗しない。

ルイ、

お前も

この時間に酔いしれてんだろ？

シャツを捲ると

サラシに隠された白い胸が露わになる。

コイツは何故か、
男と偽って京王にやって来た。

もしあの時

お前が俺を殴り飛ばさなければ…、

俺がお前のシャツを破かなければ…、

出会っていたとしても

お前の存在に気づけ無かったかもしれない。

「お前はいつだって綺麗だ」

「言っなよ…、そっいつ事…っ」

顔を埋めると
すぐに反応する。

唇に

体に

キスを落とす度、

表情が女になっていく。

唯一、俺の焦がれる女。

お前と出会ったのは運命だ。

「俺が好きか？」

「…好きか嫌いかで言ったら、好きだよ」

「……………」

「何だよ？」

「嬉しくねえな、全然」

「……………そうかよ」

「惚れる」

「あんな……」

「お前は俺の物だ」

「俺は物じゃねえ」

「お前が好きだ」

「……」

「結婚してくれ」

「ふざけんな……」

「バカか」

俺は、真剣なんだよ。

もう一生、

お前以外は抱かねえって決めてんだ。

「バカ…、相模、マジでこんな事…」

ルイの白い肌に土が被さる。

白い中に浮かぶ砂利の色は

コイツの肌を余計鮮やかに魅せる。

「相模…！」

お前…、

本当は俺の事好きだろ？

じゃねえと

こんな時、抱きついて来ねえだろ。

太陽の照らす真っ昼間。

花びら一枚一枚が透き通る様に光る。

俺達を隠す様に

一心に光を受け止める紫陽花。

ルイの体を土で汚して
貪る様に抱いた。

腕の中で

動く度に声を上げるルイの顔を見て、

やっぱり俺も

凄え感じた。

抱く時だけ

俺に腕を絡めて来る。

それがお前の本心だと信じてる。

ルイ、

好きだ…、お前がー！。

お前も早く素直になれ……………。

俺に惚れる。

· a n e ·

独占欲 3 (後書き)

短くて特に盛り上がりも無くてもスミマセン。

どうかお許し下さい。

その女は「相模……」と俺を呼んで寝返りを打った。

「……………」

涎、垂らして寝てやがる。

いつまでもガキだな、コイツは。

そっと拭って頬にキスをする。

俺の日課だ。

起きない様にそっと抱きしめる。

よく食べる割には細い身体だ。

女の柔肌が心地良い。

このまま、コイツを一生俺の部屋に閉じ込めてしまおうか。

近頃真剣に考える。

どうすれば、ルイの全てを俺が独占できんのか。

ルイの顔や身体も。その存在さえも、他の誰かに見せたくねえ。

俺だけが コイツの魅力を知ってればいいんだ。

この女の味も、一生自分一人が独占してえ。

この涎垂らして寝てやがる間抜けな顔も。

「……………」

全部俺の物だ。

「ふあ…………、ああ…………」

腕の中で手足が動き始める。

犬みてえに伸びを繰り返して、顔を擦ってやがる。

そのうち難しそうな顔をして片目を開ける。

寝起きのボヤけた目が俺をジッと見てた。

この隙だらけの顔…………。

コイツの寝起き顔は仔犬みてえだ。

——可愛い奴め。

「目エ覚めたかよ」

「……ん？」

俺の眠り姫が起きた。

その女は暫くジッと俺を見る。

まだ眠そうに瞬きを何度か繰り返す。可愛いらしい唇が「相模……」と俺の名前を刻んだ。

「また起きてたんかよ？」

「まあな」

眠れる訳ねえだろうが。

お前の寝顔が見れる貴重な時間だったのに。

「アンタ、いつ寝てんだよ？」

「さあな」

いつもお前の寝顔を見て、どうやってこれから束縛してやるうかと妄想する。

お前が一生俺から離れねえように。

いつそのまま身体中に鎖を巻いてしまおうかとも考えた。

服を履いで、ベットに括り付けてやりてえとも思う。

「寝顔見られてばっかで恥ずかしいよ……」

「……………」

コイツの悶える顔が溜まんねえ。

子供みてえな剥き出しの割れ目に口付けた時の声も。

コイツの味も。

一度それを知ってからは俺の脳裏にはそんな事ばかりが浮かんでは消える。

今でもそうだ。引っ付いてくる身体の柔らかさに襲いたくなる。

必死で女を隠してる胸を履いで、今すぐ喰らい付きてえ。

ルイの真っ赤なクリトリスを嫌という程舐めてやりたい。

「相模？」

「……………」

とんだ変態じゃねえか……。

ベットで微睡んでると、コイツと過ごした最初の頃を思い出す。

まるで男と変わんねえ身なりで、シャツがはだけるまでまさか女だとは思いつかなかった。

いや、それでも眼前に晒されたアレが女の胸だと理解出来なかった。

あれはただの脂肪なんじゃねえかって少しの間考えた。

触ってみた。

それは小さいながらもふくよかで、掴むと柔らかい。

『……………』

確認の為に、もう一度手を動かしてみた。

俺の掌に収まる小ぶりの膨らみは、確かに柔らかく、そして微かにトクトクと小刻みに伝わる鼓動は作り物じゃねえって事を指に伝えてきた。

『本物……？』

人間はあり得ない物を見ると 脳内でそれが真実かどうかを検証するために、暫く静止するらしい。

それは自分の身を持って知る。正面を見ると男。しかし掌から伝わる感触は女。

初めての経験だった。

こんな生き物が世の中に存在するのかと。
今更目の前の現実を疑った。

それは真実かどうかを俺の頭が答えを出す前に

『何すんじゃ、ボケてるあああああ！！』

と叫ぶ声と共に打ちのめされる。

これも、初めての経験だった。

ソイツは殴りやがった。この俺を。相模龍を。

最早女とは思えねえ馬鹿デカイ声を張り上げて。

まだこの現実を受け止めきれねえ矢先に、アイツは思考停止状態の俺に拳を突き立てやがった。

一瞬、どうして俺がステージに倒れてんのか理解できずにいた。そして頬に来る痛みからコイツに殴られたんだと分かった。沸々と怒りが込み上げてくる。

あん時のことは凄え今でも覚えてるぜ。

誰が主人で使用人か、その男女に分からせてやろうと歩み寄る。その女の胸倉を掴んだ。奴の顔を見下ろす。

その表情は、さっきまでと違って力の抜けた顔をしていた。虚勢を張って声を荒げてたこれまでの表情じゃなく。

何かを諦めたような、脱力した顔だ。

そして俺は、その顔に一瞬女を見たんだ。

精神的な弱さを、胸を触れられた事への恥じらいを、ソイツは無意識に表情に出していた。

心の揺れと戸惑いを、黒い瞳の奥にはつきりと見た。

女、だと思った。間違いなく、これは女の顔だと。

胸倉を掴んだ手に、つい先ほどまでの柔らかい感触が蘇る。
初めての経験、初めて俺を殴った女。

見た目はまるきり男の癖に。ふと見せたコイツの最奥に眠る本質を
見た時、無性に胸が疼いた。

ー面白えじゃねえかー

作っていた握り拳の代わりに、顔を近付けた。

俺が近付く度、表情に戸惑いが出始める。

何をされるんだろうと不思議な顔をして。でも逃げよう音はしねえ。
………… コイツ、知らねえのか？

有無を言わせず、俺を見るその女に口付けた。

一瞬体がビクリと跳ねるが動かない。
まるでされるがままに立ち尽くしてる。

女の唇は柔らかかった。とても。

だけど冷たい唇だった。重なるとまるで氷を溶かすみてえに、次第に俺の体温で温められていくのを感じた。
そこはかとなく芳しい香りがふわりと舞った。

見た目と、ソイツの醸し出す哀憐な魅力とのギャップが、更に俺を
駆り立てた。

ーコイツの、女の部分をもっと開発してやりたいー
と。

見てみたくなった。
俺に抱かれて女になったコイツの顔を。

今みてえに、俺の前でどんな顔を見せんのか。
珍しい物を手に入れて、俺は一人ほくそ笑んだ。

その女はマジで何にも知らないみてえだ。本当に、何も。

試しにキスを試してみる。
キスごときで顔を赤く染めて「な、何すんだ！ やめろよな！」と
逃げ惑う。

「普通だろ」と言つと「そ、そうなんか……？」「とすぐに信じる。

「……………」

もう一度キスを試してみる。

女はウツと一度固まって、それから殆ど抵抗しなくなった。

胸を触る。そうするとまた騒ぐ。

「契約。忘れた訳じゃねえだろうな」

俺がそう言つと、またウツと固まった。

「……………」

胸を隠すサラシを解いて小さな膨らみに手を置いた。

サラシから解放された胸は蕩けそうな程柔らかく、驚くほど感度が良かった。

スゲエ、まだ何にもされてねえピンク色じゃねえか…………。

突起に口付けながら「こんな経験あるか？」と聞いた事がある。「あるわけ…………、ねえだろ！」と声を震わせて返して来た。

フン、と今度は歯を立てる。思った以上に感じるらしく、体が小刻みに痙攣を起こし始める。

俺だけが知ってる体。俺しか知らない体。この女にキスすんのも。

こうして胸を攻めてやれるのも。

この女が知ってんのは俺の愛撫だけだ。

無性に独占欲が強まる。

何にも知らねえウブな奴。

全部、初めてか。そうか……。

不思議な感情だと思った。コイツの喘ぐ顔をいつも見ていたいと思う。

日々、少しずつ俺のキスに慣れてくる反応が楽しみだった。

夜はコイツを抱いて寝た。

抱きしめるとつぶれそうに柔らかい。

たおやかな匂いがする。母性を思わせる香りだ。

最初は腕枕にも戸惑ってる様子で、それでも「普通だぜ？」と言ってみると「そう、か」と信じる。

次第に眠りに就くと、警戒した色が消え始める。安心したように、スースーと心地いい寝息が聞こえ始める。

少し動いて、腕を絡めて来て。今度は俺の腹に腕を回し眠る。

可愛いと思った。小動物みてえで。コイツは眠るときだけは俺に甘えてくるんだと。

額にキスを落とす。起きてる時と違って、嫌な顔をしねえ。

頬を撫でてでも気持ちよさそうに寝てやがる。

「……………」

その寝顔を見て、自然と顔を緩ませる自分が居る。それが不思議で仕方無かった。

「……………フッ」

可笑しなモンだぜ。よく考えりゃあ、何でこんな奴にマジ惚れしちまってるんだか。

なりも言葉も男みてえなクセに。

この女をこんなにも可愛いと、愛しいと思うのは何故だ。

どうしてルイをこんなにも束縛して俺一人で独占してやりたくなるのか……………。

「ジロ……………」

「……………」

まるで、分かんねえ。

自分の脅威が恐ろしいほどに不明だ。

「アンタ、さっきから一人で思い出し笑いしてたぜ」

「……そうか」

「何だよ、さっきの“フツ”って笑い」

「知るか」

「オレ、アンタが思い出し笑いするの初めて見た」

俺を悩ませるその女は、珍しそうに顔を覗き込んで来る。

何度襲つても、まるで隙だらけの表情だ。

「バカか……」

その目をジッと見ちまうと俺は終わりだ。

思い出す。コイツの俺に感じるあの顔を。

「……………」

「相模つてば。」

「また考え事かよ？」

これまで俺に開発されてきた、戸惑いだらけのあの顔が、いつからかうつとりとしたものに変化するようになった。

「バカ、相模……！」

そんな過去に想いを馳せながら、起きかけたルイの体をベットの中に押し倒す。

俺の体温で温まってた体は、まだ仄かに暖かい。

ソイツは突然の事に驚いた顔をしてる。

開きかけた口をすぐさま塞いだ。

脳裏に、つい先頃まで思い出していたルイの強張った表情が浮かんだ。

「バカ……」

それを遮る様に、キスの合間にアイツの濡れた可愛い声が漏れる。

その唇はすぐに開いて俺の舌を受け入れ始める。

歯型を辿って口内を刺激してルイの舌に絡める。ほどなくして、俺の首元に腕を巻き付けてくる。

薄く開けられた視界の向こうに、気持ちよさそうにトロンと瞳を潤ませるルイの顔が見えた。

心の奥が溜まらなく疼いた。

ルイは気持ち良さそうに息を吐き、あとは俺の思っがまま、素直に身体のを全てを委ねて来る。

腹を撫でてやるとくすぐったいようだ。

そうしてクスクスとよく笑う。

時折、俺の指先の行き先を見つめ、気持ちイイよと呟く。

どれも堪らなく可愛い。

肌で快感を受け入れる事を覚え、素直に声を出すようになった。

足を開かせた時、恥ずかしがる様子も初々しかったが、こうして俺からの愛撫を心待ちにして頬を染めるルイも愛らしい。

そこは、早くも濡れている。

感じるか、俺に。

俺が、欲しいか。

……可愛いなお前は。

「相模……」

「どうした？」

「……」

わざとらしく聞き返した。

言葉の代わりにルイからため息が漏れだす。

「気持ちいいか？」

「うん……………」

小さなクリトリスはまだピンク色のままだ。

そこは最初は柔らかい。

頭を撫でるように、先端を指で優しくこすってやる。

「ああん……………」

そこは素直に反応し、ピクピクと痙攣を始める。

ルイの愛液が指を濡らし、滑りを持つようになる。

次第に硬く大きく張り詰めてくる。

小さな粒が、指で摘める位に成熟する。

こうなると早い。

何をしても感じるようだ。

爪を立てて摘まんでみる。

優しく、強く。

身体は直ぐに震える。今にも達しそうな鳴き声を上げて悶え出す。

その声に、俺も最高に興奮させられる。

好きな女を悦ばせる事が、男にとっては最大の興奮材料になるらし

い。

こんどはクリトリス全体を指でひねり、舌先で愛撫する。
ルイが泣き始める。

最後、それを全て口の中に含んだ。
陰毛の無い、まるで子供みてえな身体だ。

そこはこれまでの愛撫で真っ赤に色付き、ピンと張っている。

舌先に小さく硬い物が当たる。
それを何度も舌で絡めて転がす。

その度に内腿が痙攣を起こす。
絶頂が近いようだ。

キツく吸い上げた。
悲鳴にも似た声が聞こえる。

更に吸い上げる。今度は舌を使ってじっくりと。

直後、口の中に蜜が溢れて来る。

それを味わう。クリトリスを吸い上げながら。
逃げようとする身体を捕まえ、もっと狂えと想いを込めて。

女は何度でも絶頂がある。
与えれば、与える程。

ルイがもう無理だと叫んでも尚、身体はめくるめく快感を求めて悶

え続けている。

今日は何処まで俺の愛撫に耐えられるか。

そんな事を考えながら、更に追い立てて行った。

そこは最早、愛液で濡れそぼっている。

俺の唾液をルイの蜜とで局部全体が滑って指で開けにくいほどに。

「あああん、ああん！！ もう駄目、駄目だよあ！ ああん、ああ
ッ、イク、イっちゃうよおお！！」
「凄えな……」

自分の下半身にも抑えきれない昂りを感じつつ、もう少し我慢し
るよと言い聞かせる。

クリトリスはこれまでの愛撫でビクンビクンと痙攣を繰り返して
いる。

無理だと連呼しながらも、また絶頂を迎えたようだ。
それでも解放してやらない。まだまだ。もっと狂え。
淫乱に俺を求めろ。

一度口を離し、そこを見る。

むき出しに近い位に膨れ上がった女の急所は、何もしなくとも痙
攣を繰り返している。

「とどめだぜ、ルイ」

それを再び口に含み、歯の間に挟んでみる。

「ひっ、ひああ！！ ああっ、ダメ、それダメ！ それ嫌だ……！」
「そうか」

そんなに気持ちいいかよ……。

顎に力を入れないように、そっと甘噛みしてやる。
クリトリスを啜えたままで左右に顔を捻ってみた。

「あああああ！！ あああん！！」

歯間にあるものの先端を、舌先だけでチロチロと舐めてやる。
ルイの喘ぎ声が、動物のような泣き声に変わった。

今度こそ必死で逃げようとする。

動けないように太腿を抑えつけ、それを何度か繰り返した。

ルイの声が裏返る。

愛液も、止めどなく溢れて来た。

「あああん！！ し、死ぬ、死んじゃうよおお！！ ひああ！！」
「クソ……」

ルイの声に最高に興奮させられる。

俺もどうやら限界のようだ。

?? ああ……。

?? 何だつて、こんなに興奮してんだか。

?? ルイの鳴き声を聴いて一人興奮してる様は情けなくも思うが、
こればかりは生理現象だ。

?? 仕方ない。

?? 始めこそ、恥ずかしそうに頬を染めるルイの顔が可愛い、
その顔見たさに悪戯をしていたが。

?? 最近ではセックスの快感を覚え、どうしようもない位に善が
つて快感と苦痛の狭間で見せる顔を見ては無性に男心を掻き立てら
れている。

?? S だろうか。

?? ? ? ? ……………。

?? S だろうな。

?? ルイに関しては…………。

?? 堪え切れない程に勃起したペニスを入り口に当てがう。

?? 興奮しすぎて痛みさえ伴うそれを、腰に力を込めて中に侵入
していく。

?? 先端から半ばまで、そして前後運動を繰り返しながら全てを
その中に入れていく。

?? 程よく収縮を繰り返すその中は、いくつものヒダが瞬時に自
身を啜え込んでくれる。

?? 愛液で滑らかに滑る。
?? ソツとする程の快感に瞬時の内に飲み込まれ、どうしたものと溜息を吐いた。

?? 暫くの間快感に溺れた後、再び動きを再開する。

?? ゆっくり腰を引き、カ리를ギリギリまで抜き出したソレを再び子宮に向かって侵入させた。

???

?? ペニスが全て埋まるや否や、腕の中のルイが切なそうに顔を歪め、泣きそうな声で喘いだ。

?? 本気で惚れた女が、自身に感じて泣いている。

???

「クッ……」

??クッ……。

???

?? 何でそれだけでこんなに感じちまってんだ。

?? 最近いつもこうだ。

?? 俺はどうやら、ルイを抱く時は早漏になるらしい。

?? 情けねえ。

「アッ、アッ……！」

「クッ……」

?? お前の前では俺の男のプライドは滅茶苦茶だ。

?? 弱っちいもんだ。

?? その女は最高に感じ易いみてえで、何回か出し入れを繰り返

すと膾の中はトロトロに仕上がる。

?? だけど、いつも処女のようにキツイ。今でもルイを壊してしまわねえか心配で仕方ない。

?? だが皮肉にも、それが男にとっちゃあ最高だ。射精感を高められちまう。

???

?? その上、腕の中の女は俺の唯一惚れた女であり、可愛い顔を惜しげもなく崩して素直に気持ちイイと声を出してくる。

「クソ……！」

?? そんな顔を見せられちまえば一発だ。

?? ああ。

?? 俺の負けさ。

?? ルイ、お前には敵わねえよ……。

?? お前が感じる倍以上、俺は果てそうになる気持ち在必死で抑えてる。

ルイが感じている顔は反則だ。

?? いつから俺はこんな弱い人間になっちまったのか。

?? そして今日も「クソ……！」と弱音を吐き、ルイのなかで最高に感じている。

???

?? 欲しいものが手に入った今、お前に嫌われない為に必死に繕っている自分がある。

?? 愛し合ってる今でも片思いの頃と同じだ。

?? 今度はルイが自分から離れて行かぬように。ただ、お前の
喜ぶ事、気持ちイイ事を探しては与えるのみだ。

?? 今度は何か道具でも用意しておくか。

???

?? 射精感をなんとか押しとどめ、声が出そうになるのを息を呑
んで押し留めながらそんな事を考えた。

?? 願わくば、この幸せが一生続くように。

?? 十年後も、二十年後も、ルイが俺だけのものであるように。

- e n d -

r u i · l o v e 4 (後書き)

大変長らくの、そして微妙な終わりでごめんなさい！

とりあえず龍の甘々(？)(。 - - ;)(心の声：やっぱり甘々に上手く出来なかった)

が終了で、次にリヨウ×ルイのお風呂でイチャイチャを書きます。

大変遅くなり、申し訳ありません。

そして本当に有難うございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6255p/>

優しい悪魔 / rui.love(完結)

2011年6月23日16時03分発行